

日ロ戦争と風刺に見る 〈力の政治〉の考察

ソク・ファジョン



韓国からのソク・ファジョンと申します。「風刺挿画に見られる日ロ戦争と力の政治」について報告します。この論文は100年あまり前の時事漫評を分析することで、日ロ戦争とそれをめぐる国際関係の変化を読み解こうとするものである。帝国主義時代の風刺挿画の史的価値は、それがどれだけ客観的で、かつ、正確に戦争と当時の「力の政治 (Power Politics)」の国際関係を代弁しているかにかかっている。本稿では挿画分析という研究だけではなく、日ロ戦争研究の現在の動向もともに提示することにも力点を置いていた。

日ロ戦争研究は現在においても軍事史に偏重しているのが現実である。そのような中で日ロ戦争の原因と結果を国際関係の中で幅広く分析することは、戦後100年が過ぎた現在、どの時代よりも必要に迫られている課題といえる。日ロ戦争をめぐる国際関係には、ヨーロッパの国際情勢、第一次世界大戦に至るまでの同盟関係と勢力均衡の変化、帝国主義時代の東アジア列強の覇権競争、そして列強間の合従連衡など、全てが内包される。2004年から2005年にかけての日ロ戦争100年を振り返る国際シンポジウムとその報告論文集や著書などでも、日ロという戦争の当事国の間の関係だけではなく、日ロ戦争を国際関係と関連させて位置付ける試みが大きな趨勢となっている。

国際シンポジウムで新たな登場をしたもう1つの研究動向は、日ロ戦争を当時のあらゆる媒体と関連させて分析する試みである。事実的な絵画とイラストレーションなどは、主に歴史的場面の再現に重点を置いているが、風刺挿画は国際関係と対外政策を面白く風刺したケースが多い。風刺挿画は、単純に当時の情勢を痛烈に批判してだけでなく、当時の国際関係の変化を的確に表している部分があるのである。それゆえ、日ロ戦争を風刺した挿画は、一瞬で笑い飛ばす単純な寓話ではない。挿画の風刺言語やその表現は歴史史料と外交文書ぐらい客観的でもあり分析的かつ事実的でもある。

われわれは風刺挿画から多様な言語と象徴を覗き見ることができる。つまり、風刺挿画には、他の社会や文化を眺めるイメージ、1つの社会や文化圏の価値体系と慣習、伝統、そして帝国主義時代の独特な言語や象徴体系までも発見することができる。それゆえ、風刺挿画から帝国主義列強の異質の他文化に対する歪曲されたイデオロギーと偏見を濾過して解釈することは、非常に難解な点でもある。

筆者が分析対象として選んだ26編の挿画は、イギリスの*Punch*、オーストリアの*Der Floh*、アメリカの*Harper's Weekly*、*Cleveland Plain Dealer*、*Minneapolis Tribune*、*Brooklyn Eagle*、日本の『東京パック』などに載った時事漫評である。各国の膨大な挿画資料の中から筆者が分析対象を選

定した基準は2つである。1つは挿画が当時の帝国主義時代の国際関係をどれほど正確に反映したか、そして、挿画を通していかにして日ロ戦争の国際関係がより分かりやすく、面白く理解できるかという点である。ロシアとフランスの時事漫評もいっぱいあるのですが、例えばフランスの*Le Petit Parisien*, *Le Rire*とか*Le Petit Journal*は非常に有名な雑誌で、一般に公開されたことが多いです。この漫評の中に事実性の強い絵画とイラストが多かったから、今回の分析対象からは除外した。

また、この試論は挿画そのものの研究を目的としなかった。この研究の目的は、風刺挿画の言語を歴史的な事実と連繋させ正確に解釈することによって、これを歴史教育の資料として適切に活用するきっかけを作ることにある。

これから挿画を見ながら説明します。最初は「秤にかける日本—イギリスと同盟か、ロシアと提携か」という*Der Floh*の挿画です（左）。ロシア熊とイギリス獅子との間でどちらを選択しようか悩んでいる日本猿。1901年7月初めごろ、日本の選択が既にイギリスの方に傾いていることを表している資料である。喜色満面の獅子と、暗い影で象徴されるロシア熊の暗鬱な姿、そして小さくて素早い猿。猿がぶら下がっている天秤はすでに英国獅子の方に傾いている。

次は「日英同盟とロシアの孤立」に対しての挿画です（右下）。日英同盟が締結された後、ロシアがうろたえてびっくりする姿である。日英同盟が成立することによってロシアがアジアで包囲され、孤立するかもしれないという危機意識が以後さらに深化した。日英同盟の成立によるロシアの孤立感がどれほど深刻だったかについては、日ロ戦争100年が過ぎた今でも、ロシアの学会で相変わらず強調されている。

日ロ戦争の挿画にあるイギリス人は、日本女性と同じ服装をしている老人の姿である。日本女性

はお茶を入れながらロシア人を安心させようとするが、団扇と仮面で顔を隠しているイギリス人が正体を現すと、慌ててイギリス人の懐に入り込んでしまう。ロシア人は突然の状況にびっくり仰天するが、イギリス人の裾に隠れて日本女性は見せ付けられたごとく、ロシア人に決別を告げている。

当時の挿画では、日本女性は濃艶な女性、または芸者としてよく描写される。帝国主義時代の



「強い男性」として描かれる欧米とは対照的に、アジアは脆弱で依存的な、あるいは性的対象として描写されることが多い。これは「オリエンタリズム」的偏見の典型とも言える。植民帝国であるイギリスを老衰な老人として描写し、ロシア人をみすばらしい格好の巨人として描写することも、また当時の風刺挿画と象徴から発見できる共通点である。

「日英同盟と露仏同盟」(右)。中国という馬車をめぐって列強が戦っているために、馬車を引いているクーリーは苦しそう

Heberlastet und überlastet.

Originalzeichnung von F. Gauert.



にため息をつき、顔には汗と涙がたくさん出ています。貪欲な中国商人の服装をしたイギリス人ジョン・ブルはパイプをくわえ、喜色満面の顔で両足を伸ばした楽な姿でクーリーの辮髪を手綱にして引っ張る姿を見せけている。この横に座っている日本軍人もまた余裕のある表情を浮かべている。一方、ロシアとフランスは、日英同盟に張り合うつもりで車を揺らし、日英両国を動揺させようとするが、その車はびくともしない。日英同盟に対立するロシアは実際に露仏同盟をアジアに拡大しようとした。しかし挿画が示唆するように、実際には露仏宣言(1902年3月16日)は結局形式的な宣言に過ぎなかった。

次は「大韓帝国の最後の絶叫—局外中立宣言」です(左下)。1904年新年冒頭、日口戦争が差し迫った状況下、1月23日、当時の大韓帝国朝廷は「厳正中立」を宣言した。満州と韓国をめぐる東アジア覇権調停のため、今まで5ヶ月あまり続いていた日口交渉は、互いに立場の違いだけが歴然

としたまま、この時すでに決別していた。韓国の中立宣言は、日口両国が容赦なく押し引きする力比べに為すべくなく縛られた状況のもと、戦争に関わりたくないという最後の絶叫であった。びんと張った綱引きに足場を失った無力な韓国は、ほぼ死ぬ寸前のように挿画に描かれている。



戦勝以後、日本がポーツマス講和でロシアに「絶対に譲れない」講和条件として内部決定した最重要な要求事項は、「韓国での日本の自由行動権の確保」であった。結局、戦争以後、日本は韓国を

保護国化し、5年後には韓国を併合した。韓国は日ロ戦争の最大の被害国であった。

戦争の直接的原因であり発端は韓国問題にあった。しかし、日ロ戦争の原因と結果をテーマとする韓国を除く海外の研究では、韓国問題は相変わらず副次的な重要性を持つ程度のものであるか、もしくは疎遠に扱われている。日本の著名なある思想史学者、子安宣邦先生は日本の日ロ戦争研究傾向を次のように看破している。「日ロ戦争を解釈するのに韓国は存在しない。軍事的な要衝としての朝鮮半島は存在しても、韓国は存在していない。それは当時の日本軍部の認識ばかりではなく、日ロ戦争後の百年の現在、その戦争を記述する日本の歴史家、研究者たちにも存在しない。日ロ戦争において韓国は日本人にとって存在していない」と言っていました。

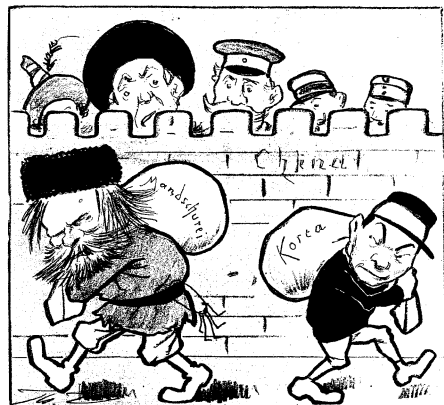


INNER JAPAN—"COME DOWN OUT OF THAT TREE! THOSE APPLES BELONG TO ME
Drawn by R. D. Handy, of the Duluth News-Tribune.
Russia's astonishment is not feigned, for he was not really aware (with Manchuria in one hand
and his grasp upon Korea) that he was in a forbidden tree until
Japan actually went gunning after him.

次は、「リンゴを触らないでもう木から下りて来い!」という挿画です(左)。リンゴは満州と韓国を意味しています。韓国と満州に対する日ロ両国の認識の違いを明白に示す挿画である。1900年10月、ロシアは義和団事件を発端に満州をすでに手中に収めた。そして1903年5月に鴨緑江流域龍岩浦に潜入し、韓国までも掌握しようとしていた。風刺挿画はこれのように説明している。ロシアは日本が追及する前まで、自分が禁断の木の上に座っている事実さえも全く認識していなかった。「木から下りろ」と日本人農夫が銃で脅迫するまで、自分の行動が本当に危険であることを悟ることができなかったのである。挿画では韓国と満州は中国という木に垂れているリンゴとして表現されている。

次は「韓国と満州」というDer Flohの挿画です(右下)。ロシアにとって満州は重要な地域と言える。なぜなら、シベリア横断鉄道がモスクワからウラジオストクまで最短距離で到着するためには、必ず必要となる地域だからである。北側のアムール川沿いに建設する鉄道よりなんと2,000km以上も短縮できるため、それは黄金の路線と言えるものであった。ロシアは東清鉄道だけではなく、途中でハルビンから南満州に下がり、旅順、大連に至る東清鉄道南満州支線を敷設していた。義和団事件で東清鉄道が破壊されると、正規軍隊を派遣し3ヶ月で満州を占領することになったのも、結局シベリア鉄道を保護するためであるというのが主な理由であった。

みすばらしい格好のロシア人が満州を手に入れようとしていて、日本は韓国を独り占めしようとしている。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなどの列強は万里の長城以南からこれを心配の眼で見つめている。



特に清国の表情が挿画にないのは、清国の柔弱な国際的な地位を表している。

1888年以降、韓国は日本にとって「利益線」であり、一步進むことができれば「主権線」になりました。「絶対に放棄できない」という対象で韓国を考えていました。日清戦争で韓半島での清国の宗主権を剥奪した日本は、ロシアとの3回に渡る協約を通して、韓国での権利を1つずつ確保していった。

次は「清国の領土と主権尊重を!」、アメリカの挿画です(右)。角逐の場となった東アジアという食卓は修羅場と化している。ロシアと日本の肉弾戦で椅子が飛び交い、テーブルクロスが落ちかけている。その一方で列強は混乱の中でも食卓上の食器、中国を意味していますが、食器が割れることを恐れている。食卓の横で日本がロシアの髭をもぎ取ろうとしているのを見ると、日口戦争での日本の勝利がすでに予想されていることが分かる。イギリスとアメリカは食卓上の陶磁器を取り揃えながら、中国を保全するために余念がない。それに比べて、ドイツは自分の分け前もとることができずにいる。晚餐の場をただ見つめるだけの韓国は、無気力な案山子の格好でいるに過ぎない。



次です。「満州の門戸は開いている」、アメリカの挿画です(左下)。ロシアは満州撤兵条約(1902年4月8日)に従い、一次撤兵を履行した(10月8日)。しかしその6ヶ月後、履行すべき二次撤兵を中断し、南満州を再び占領した。この際、ロシアは二次撤兵のための事前保障として、清国に七カ条の案を提示したが(4月18日)、列強の支援を受けた清国はこれを断固拒否した(4月22日)。



対外的にはロシアは列強の危惧心を鎮めるため満州の門戸開放を繕った。しかし満州を再占領した後、ロシア皇帝の選択はこれに反するものであった。満州でのロシアの独占的権利を守護し、満州はもちろん、鴨緑江の利権を通じ、韓国への積極進出論を主唱したベズブラゾフを國務顧問として任命したことは、このことを示すものである。

挿画では満州の門前には陰悪なロシア熊が待ち構えている。満州に目を凝らしている訪問客らは、日本、アメリカ、イギリスである。アメリカ人のかばんの中には満州での商業的利益の追求計画が入っています。イギリス人のかばんの中には戦



略的な計画，そして一番前に立っている日本人はその身体は小さいが，かばんの中には満州をまるごと飲み込むための計画が入っている。

次です。「日ロ戦争は日英同盟と露仏同盟の対立？」という挿画です（左上）。イギリスのジョン・ブルとフランス人婦人がそれぞれ一丁の銃を前において向かい合っている。ジョン・ブルのタキシードの後ろの日本軍は刀を手に握り，今すぐにでも攻撃する態勢である。一方，片手には銃，腰には切れ味の悪そうな刀，そして鞭まで隠したロシアがフランス婦人のスカートの裾に隠れている状況を覗き見ている。イギリスとフランスは銃

口を手で塞いだまま，顔に満面の笑みを浮かべているが，戦争の危機に直面した立場から，あまり自由が利かなそうな表情である。

次の挿画は日ロ戦争が勃発する国際関係をよく表している（右）。日ロ戦争が事実上の日英同盟と露仏同盟の対立であることを風刺したものである。同時にロシアと日本の戦いは，ヨーロッパ諸国の代理戦，すなわち，世紀に渡ったロシアとイギリスの対立，そして，それぞれの同盟関係ゆえに戦争することを危惧するイギリスとフランスの矛盾する立場をよく表現している。イギリスとフランスは同盟国であることから，戦争に関わることを避けるために，1904年4月8日，いわゆる「真なる協商（Entente Cordiale）」を結んでヨーロッパに戦争が拡大することを回避した。



次です。英米の日本支援に対しての風刺です（左下）。イギリスとアメリカの金持ちは日本の闘鶏の足爪を鍍金するのに喜んで大金を投入する気配である。ジョン・ブルは，挿画によれば，1500万ポンドを提供するようである。日本が勝ち続ける背後には，こ



GILDING HIS SPURS.

のように英米両国の支援があった。闘鶏を出す日本の天皇は，闘鶏場の中まで入って応援している。天皇の焦っている表情と対照的に英米紳士らののんきな表情が目を引く。

次です。「猿と熊の戦い？」です（次頁右上）。ロシアと日本がおのおの戦費支援を受けている。芸を演じる小さい日本猿の手には鞭が持たされ，帯刀している。帽子も熊のそれと比べれば，そんなに大きくない。休憩時間にも拘わらず，猿は既に熊の鼻輪をしっかり握りしめた

くましい姿である。一方、巨体の熊ロシアはフランス婦人から大金を支援してもらっている。クマは傷だらけの体に包帯を巻き、長くて大きいがまともには使えなさそうな鞭さえも杖として使用している。体中が傷だらけで服もぼろぼろの熊は、国内外ともに窮地におかれたロシア専制政治の様子をよく表現している。とても大変そうに見えるロシア熊の姿であるが、十字架の首輪を大事そうに首にかけている。

次です。*Harper's Weekly*の挿画ですが、「しっかり掴め、アンクル・サム！」(左下)。崖の下には争いに夢中になっている日本とロシアが見える。崖の上では列強が状況を見極めながら自国の利害関係を押し量っている。両交戦国と同盟を結んでいるか、もしくは利害関係を持つ列強は東アジアでの戦争を注意深く見つめている。日ロ戦争の国際関係がこの1枚の挿画に圧縮されている。



崖縁の前方で状況を見ているフランス紳士は、露仏同盟を維持するためにもロシアの弱化を望んでいないという表情である。その後ろでは、ドイツ軍がフランス紳士の介入を制止している。ロシアが東アジアにおける戦争によって足をとられる状況は、ヨーロッパにおいて露仏による挟み撃ちを恐れていたドイツにとって、そんなに悪くない話だからである。日本と同盟国であるイギリス貴族は、間違えてアジアでの戦争に関わりになることを恐れ、自分の背後にいるアメリカにしっかり掴んでくれることを期待している。

次です。これは露仏同盟に関しての挿画です。「ものすごいサイズ、とんでもない注文」(右

下)。挿画の中で戦争期間中のロシアがフランスに4千万フランにもおよぶ新たな借款提供を要請している。フランス人洋服裁断師が、ロシア人巨漢の古びた洋服のサイズを測りながら、生地がかりすぎることに困惑そうな表情である。同盟を維持するためにもロシアに継続して借款を提供することはやむを得ないが、いつ返してもらえるかが分からないので、苦しい表情である。借りた金額と頻度が多くなればなるほど、債権者と債務者の立場が逆転していく。貸した金を返してもらうためにも債権者の要求を断ること





の更新」(右下)。“東洋は東洋、西洋は西洋、しかし東洋も西洋も国境も人種も血統もない。強靱な男性2人が向かい合っている。彼らは地球の反対側から来たね。”これはキップリングの詩ですが、挿画に表わされているように、日本の国家イメージは女性と小さなサルイメージから西洋と同等な男性のイメージとして変わり登場したのは、日清戦争で勝利をおさめた後からである。日本が奉天会戦で勝利した直後、イギリスのランズダウン外相は日本の林外相に同盟更新を提



ができなくなるのである。このように逆転された債権者と債務者の関係は、露仏同盟全期間（1894-1918年）に渡り繰り返された。フランスは同盟を維持するために、投資資本を回収するためにも、ロシアの絶え間ない借款要求に応じるしかなかった。

次です（左上）。次の挿画によればこのように話しています。「婦人、そんなに冷たくしないで下さい」。しかしフランス婦人はこれ以上は無理であるというような表情で恵んであげることを冷静に拒否している。「ごめんなさい。しかし、一銭もあげられません」。先に出了た他の挿画でも見られるように、フランスの国家イメージはよく金持ちの貴婦人として描写されている。

次です。「日英同盟



案した。イギリスは1905年5月17日に防衛同盟を「防衛攻守同盟」として強化

させることを提案した。第一次日英同盟時には、敵国が2ヶ国以上の場合には発効することにした同盟だったのですが、第二次同盟では敵国が1ヶ国であっても援助義務が発生するように規定した。

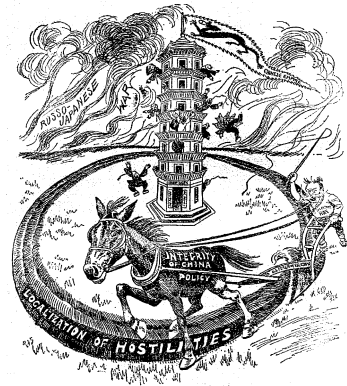
次です。「日ロ戦争とモロッコ危機」に対しての挿画です（左下）。日ロ戦争が終盤に近づく頃、列強の関心は東アジアに傾いた。フランスは地中海とヨーロッパの情勢が気がかりである。ドイツが地中海でモロッコ危機を引き起こそうとしていたからである。アルヘシラスではモロッコ問題を国際化するための国際会議がドイツの要求によって開かれている最中である。

次の門戸開放政策については、先に説明したから省略します(左上)。



た。戦争という氷土の上を一気に滑り出す4ヶ国の姿をアメリカ

次は全部アメリカ側の政策に関しての挿画です(右上・左・中央)。日口戦争に対してのアメリカの政策を明白に表しています。日口戦争は日英同盟と露仏同盟の対立であった。その点から交戦当事国はもちろん、イギリスとフランスは同盟国の戦争に触覚を立ててい



SECRETARY HAY—"I WILL CONVINCE THE FIRE TO THE PAGODA, IF I CAN."
Drawn by Cartoonist Maybelle, of the Brooklyn Eagle.
Secretary Hay is doing all he can, by glowing deeply around China, to keep the fire within bound. It is good for outsiders, but poor John Chinaman is caught in the fire-trap.



UNCLE SAM—"I MUST TAKE A FEW PRECAUTIONS, AT LEAST."
Drawn by Cartoonist Maybelle, of the Brooklyn Eagle.
The breaking out of the war between Russia and Japan was the signal for immediate activity on the part of the administration to complete the programme already laid out which should make the United States the third naval power in the world. This was Uncle Sam's precautionary measure for keeping the fire from his adviser roof.



UNCLE SAM (IN THE DISTANCE).—"IT LOOKS AS IF THE WHOLE BUNCH WAS GOING DOWN TOGETHER."
Drawn by Cartoonist Maybelle, of the Brooklyn Eagle.
They are all on slippery ice and if one slips, all fall. Although Uncle Sam keeps away from the dangerous situation, he is interested in the outcome.

かが遠くから見張っている。状況によって孤立主義の伝統に安住し国益を取りまとめる姿は、1823年、モンロー宣言以来アメリカが堅持している対外政策の主要原則の1つである。

次、「ルーズベルトの仲介調停」に関してのDer Flohの挿画です(左下)。

ルーズベルト大統領が、

日口両国の講和を誘導しながら仲介調停している。1905年6月7日、日口両国が講和を受諾することによって、ルーズベルトの仲裁下、ポーツマス講和会談が開かれることになった。

次です。「アメリカ国務長官タフトの訪日」に対しての『東京バック』の挿画です(次頁右上)。新移民法を成立させ、日本人移民を排斥するアメリカに対して日本は憤慨した。アメリカ国務長官タフトは日本を訪問し、日本女性の健康診断をしながら日本の世論を推察している。しかし、1908年に大統領となったタフトの対日政策は、前任のルーズベルト大統領のそれよりももっと多くの葛藤を満州で引き起こした。「ドルをつぎ込んで日本を満州から追い出す」



という、いわば「ドル外交」とノックス国务長官の「すべての満州鉄道の中立化」提案などがそれである。満州での日米対立の激化は、自然と日英同盟の弱화를招来せしめ、もう一方で、日本とロシアの協約を促進させた。

次、「今や日本の力は優先的に牽制されなければならない」という挿画です（左下）。日ロ戦争が日本の勝利で帰結するやいなや、アメリカとイギリスはアジアと太平洋で列強と同じ舞台に上がり、自分らの力を脅かす日本を牽制しはじめた。ルーズベルト大統領は日ロ講和を提起したわけだが、挿画では黄色の熱風を



鎮めることをアンクル・サムとジョン・ブルが合意したようである。

日ロ戦争後、満州を独占しようとする日本に対抗し、自国の利益を確保しようとしたアメリカとイギリスは、今や牽制しなければならない対象がロシアではなく日本であると合意する。

次、これは「日仏協約の結果」を風刺する『東京パック』の挿画です（右下）。東アジアでの勢力範囲と利害関係の調停のため、1907年6月10日、日本はフランスと日仏協約を締結した。これに従いフランス資本が輸入されるという噂を耳にした証券取引人と資本家らが喜ぶ様子を風刺したのが、この挿画である。

日仏協約によればインドネシアの万一の事態に備えて支出する軍費が日本に流入させることになっていて、日本経済界がこれを大歓迎している。

次、「孤立したドイツが清国と協商を試みる？」という風刺挿画です（次頁）。1907年6月から8月にかけて日仏協約、日露協約、英露協約が成立することによって、第一次世界大戦の三国協商体制が完成された。孤立したドイツは、オーストリア、イタリアとともに三国同盟を更新し、アジアでは清国との緊密な関係を結びながら、さらにアメリカまで入れた協商を試みようとした。挿画の説明はこうなっている。ドイツ皇帝が「日本の新聞は本当に賢くてすばやいな。私が夢にも見られないことを新聞に報道するなんて。一度試す甲斐があるかもなあ」と独り言を述べている。当時、ドイツ、清国、アメリカの協商を試みたドイツの孤立感を日本の言論が鋭く指摘している挿画である。





今までの挿画を見れば帝国主義時代、強大国の「力の論理」が支配する時期に、日口戦争を描写している各国の風刺挿画の特徴は以下である。イギリスの*Punch*とオーストリアの*Der Floh*は、自国の利害関係を越えた客観性と痛烈な批判力において断然優れていると言える。特に*Der Floh*の鋭い風刺挿画は、18世紀初め以来ハプスブルク帝国で育まれ、長い歴史のある成熟した風刺文化の産物であることが分かる。アメリカの*Harper's Weekly*などは、主に自国中心の視点から国内外の利害関係を風刺する傾向にある。

日本の場合、日口戦争以後の国際情勢変化の重要な流れを見落とさない緻密さが風刺画によく描かれている。それは特に日口戦争以後、国際情勢に関する風刺画が急増したことに密接な関係がある。これには日口戦争の勝利以後、

強大国の舞台に登った日本が国際情勢に関する関心と発言権を増大させたことが反映されているものと思われる。日本の国家イメージは、日清戦争以後は矮小なサル姿として、日英同盟の関連では女性として描写されたが、日口戦争での勝利以後からは西洋と同等の男性のイメージとして描かれている。

これに反して風刺挿画に表われたロシアは、愚かでみすばらしい熊のイメージとして各国の挿画に共通して描かれている。ここには、19世紀の間、西ヨーロッパ列強が全世界でロシアと対決してきた状況が反映されてきているようである。日口戦争以前のロシア熊の格好は、みすばらしいというより巨体のクマとして表現されているが、これはロシアの南下と膨張に対する漠然とした恐れ、つまり、恐露意識（Russophobia）を表しているものであろう。しかしロシアが日本との戦争で敗退を繰り返す中、ロシアが怖いという意識はすぐに反露感情に変わり、ロシアの脆弱さを痛烈に風刺するようになった。

風刺挿画を記録した当時の時事漫評家らの情勢分析と批判は、帝国主義時代に関わる外交文書と現在のそれらへの史料解釈と比べても大きな開きはなく、むしろ客観的かつ生々しい記録として評価されている。歴史的な真実性と客観性をどの史料よりも多く内包していると言える風刺挿画は、その点で重要な歴史資料の1つとして評価されても差し支えないだろうと思います。ありがとうございます。

（石和静 世宗大学人文学部兼任教授）